

教師にとっての「扱いにくい子ども」の特徴について

— 自由記述のテキストマイニングを通して —

青木多寿子・小河 響子¹

(2009年10月6日受理)

What is “Handling Difficulty Students” for School Teachers?

— Throughout interpretation of text questionnaires by text mining —

Tazuko Aoki and Kyoko Ogawa

Abstract: Recently, school teachers find new types of hard handling students. They do not always do illegal behavior nor make some troubles. However, they are difficult for teachers to manage them. The purpose of this research is to identify the characteristics of such handling difficulty students comparing with uncontrolled students. Sixty four elementary school teachers and fifty nine middle school teachers were participated in this research. They answered questionnaires with high quality text data about these students. We analyzed them by text data mining with word miner. The results are as follows; the most difficult managing students are related with bullying, school refusal, some kinds of violence and disrespectful attitude to teachers. On the other hand, handling difficulty students are selfishness, related with lack of attitude to listen to others and to work well with others, easily making fun of his/her friends and taking counterattacked attitude against teachers. Also teachers who answered that there were no handling difficulty students in his/her class were just twenty five percent. We discussed how to educate these hard handling students.

Key words: handling difficulty students, text mining, the difference from the hardest manage students.

キーワード：扱いにくい子ども, 自由記述分析, 指導困難児との違い

1. 問題と目的

教師は、学校生活の様々な場面で、多様な個性を持った子どもたちと日々関わっている。そのような中、今日の学校現場では、「子どもが理解できない」「指導がうまくいかない」と言う教師の声が聞かれるようになった。教育現場の観点から、子どもたちの変化を取り上げた河上（1999）は、このような子どもを「新しい子ども」と表現している。他方で中野・初澤・昼田・松崎（2002）は、最近の子どもの問題行動の理由とし

て、子どもを取り巻く環境の変化をあげる教師が多いと指摘している。具体的に子どもを取り巻く変化を考えると、IT革命で社会が大きく変化しつつあり、少子化も進行している。1996年の文部科学省の中央教育審議会では個性が重視されるようになった。このような社会の大きな変化の中で、今までにないタイプの子どもが見られるようになったのは必然の結果といえるのかもしれない。そして教師は、今までにないタイプの子どものたち、個性の多様化した子どもたちと学校現場で日々向き合っていかなければならない。

学校教育の場は、すべての子どもの人格の発達を援助する責務がある。したがって、問題が顕在化してい

¹ 兵庫県太子町立石海小学校

る子どもには直ちに手厚い援助の手が伸びる。しかし、問題が顕在化しているわけではないが、教師にとって少し扱いにくく、気になる程度の子どもは、援助されないままになってしまうことも多い(吉田, 2003)。教師にとって少し扱いにくく、気になる程度の子どもは、学校で集団生活を送るにあたり、誰にでも起こりうる問題を少なからず抱えており、見過ごしておくこと指導困難になる要素を持っていると考えられる。

そこで本研究では、触法行為や非行など明らかに目に見える形の問題行動を起こすわけではないが、学校で教師が指導困難になる可能性の高い子ども、つまり指導困難予備軍の子どもを「扱いにくい子ども(児童・生徒)」と呼ぶことにする。

わが国では、学齢児童・生徒に対して停学の措置をとることができない(学校教育法施行規則第13条第4項)。ただし、性行不良で他の児童・生徒の教育に妨げが認められる場合、市町村の教育委員会がその児童・生徒に出席停止を命ずることができる(学校教育法第26・40条)。しかし、小・中学生が実際に出席停止の措置がとられるケースは高校生に比べると少なく(文部科学省, 2003)、問題を起こした児童・生徒への懲罰というよりも、学校の秩序の維持という観点からとられる措置である。したがって、結局小・中学校では懲罰を与えることによって問題を解決しようとするのではなく、問題の一つひとつに教師達は根気強く対処していかなければならない。では、新しいタイプの「扱いにくい子ども」には、どのように対処してゆけばよいのだろうか。

石隈(1999)は、問題状況が大きくなって子どもの発達や教育を妨害しないように、予防的援助を行うことの重要性を指摘している。確かに多くの子どもが出会う発達上・教育上の課題を予測し、課題への準備を前もって行えば、課題における問題状況が子どもの成長を妨害したり、危機状況に追い込んでしまったりするのを予防することにつながるに違いない。しかし、学校現場では、いじめや不登校など、予防的援助というよりは、生じてしまった当面の問題に追われ、予防という面での教育ができていないのが現状である。

今日の学校における問題は、主として不登校、いじめなどであり、これらについては多くの研究がなされている。しかし扱いにくい子どものような指導困難になりそうなレベルにある子どもの研究はほとんどなされていないのではないだろうか。このため扱いにくい子どもは、研究が盛んに行われている不登校やいじめ以外の問題を抱えているために、教師はどのように対応してよいかかわらず、その対処法に苦勞している可能性がある。したがって、教師が扱いにくい子どもと

はどんな特徴を持った子どもなのか分類し、その分類によってどのようなアプローチをとる必要があるか検討する必要があるだろう。そこで本研究は、教師に自由記述アンケートを実施し、指導困難な子どもと扱いにくい子どもについて記述を求め、それを分析することで、指導困難な子どもとの比較を通して扱いにくい子どもの特徴を明らかにすることを目的とする。

2. 方法

【調査対象】 O県下の公立小学校教師64名、中学校教師59名、計123名を調査対象とした。(内訳は、性別：男性45名、女性76名、不明2名、教職経験：1～5年10名、5～10年18名、10～15年27名、15～20年24名、20年以上40名、不明4名、担任：有79名、無44名)

【調査時期】 2002年6月から7月

【調査方法】 アンケートは、O県下の小・中学校の教師に配布した。配布方法は2種類である。まず、1小学校、1中学校については全職員に回答を依頼した。この際、職員室に一定期間回収袋を用意してもらい、その後、その回収袋を郵送してもらった。もう一種類は、個人的に依頼する方法で配布した。その際、面識のある小学校、中学校の教師に一人10部程度お願いし、小・中学校の教師をしている同僚、友人、知人にアンケートを配布してもらった。アンケート用紙とともに返信用封筒を配布し、記入後は個別に返信用封筒に入れて郵送してもらった。

【調査内容】

1. 最も指導困難な児童・生徒

現在、最も指導に困っている児童・生徒の特徴および、そのような児童・生徒に対して「どのような対処法をとるか」¹⁾を自由記述で回答を求めた。また、学級担任をしている教師には、クラスの中でどのくらい指導困難な児童・生徒がいるのか、学級担任をしていない教師には、関わっている児童・生徒の中でどのくらい指導困難な児童・生徒がいるのかを尋ねた。どのような形態で行動を起こすのか(単独か、集団か)、どのような場所で行動を起こすのか(教室内か、学校内か、学校外か)についても合わせて尋ねた。

2. 扱いにくい児童・生徒

扱いにくい児童・生徒を指導困難予備軍という補足説明をし、扱いにくい児童・生徒の特徴を自由記述で回答を求めた。また、最も困難な児童・生徒と同様に、学級担任をしている教師には、クラスの中でどのくらい扱いにくい児童・生徒がいるのか、学級担任をしていない教師には、関わっている児童・生徒の中でどのくらい扱いにくい児童・生徒がいるのかを尋ねた。

3. フェイスシート

所属、性別、教職経験、学級担任の有無、担当学年について尋ねた。

【時給記述アンケートの解析手順】

分析には、WordMiner1.01cを用い、以下の手順で行った。

- (1) 回答を任意の単語に分割する。
- (2) 単語を削除（例：句読点を省く）や置換（例：「教師」と「先生」のように意味が同じ単語を統一する）し、編集する（表1）。
- (3) 回答×単語の出現頻度に基づくクロス表を作る（対応分析）。
- (4) 得られた数量得点に基づき、回答のクラスター化を行った。

3. 結果と考察

1. 最も指導困難な児童・生徒の特徴

現在最も指導に困っている児童・生徒の特徴に関する自由記述について、出現頻度2度以上の単語に反応した回答者を分析対象として解析を行った。5クラスターから11クラスターまでクラスター数を変化させて、[問題行動の頻度が多い・○○できない]、[騒ぐ]、[いじめ]、[不登校]、[服装・頭髪の乱れ]、[教室に入れない]、[暴力・言葉遣い・教師への反抗]、[けじめがつきにくい・指示が通りにくい]の8つのカテゴリーに分類することにした（表2）。表2より最も指導困難な児童・生徒の特徴は、[不登校]、[いじめ]など表面上に出て来やすく、近年教育問題としてク

表1 Word Miner による編集例

自由記述文章	編集後
遅刻が多く、自己中心的でわがままである。友達に対して暴力的な面もある。多動傾向。	遅刻 自己中心的 わがまま 友達 暴力的 多動傾向

(注) 左の自由記述文章を、右のように意味ある単語に分けて入力し、分析する

表2 最も指導困難な児童・生徒の記述に見られる特徴的な単語

カテゴリー名	特徴的な単語	検定値	有意確率	クラス内頻度	全体頻度
1 問題行動の頻度が多い ○○できない	注意	1.76	0.04	10	10
	できない	1.75	0.04	15	16
	多い	1.6	0.05	9	9
2 騒ぐ	騒ぐ	3.9	0.00	2	2
	勝手	1.63	0.05	1	7
3 いじめ	いじめ	4.8	0.00	5	5
4 不登校	不登校	3.71	0.00	3	6
	気味	3.4	0.00	2	2
	対応	3.4	0.00	2	2
	よく	1.78	0.04	1	2
5 服装・頭髪の乱れ	頭髪	4.03	0.00	3	3
	服装	3.7	0.00	3	4
	乱れ	3.7	0.00	3	4
	登校	2.37	0.01	2	5
6 教室に入れない	教室	4.87	0.00	8	13
	家庭	4.04	0.00	4	4
	入れない	3.36	0.00	3	3
7 暴力・言葉遣い 教師への反抗	暴力	3.95	0.00	5	9
	言葉	3.71	0.00	4	6
	教師	2.9	0.00	4	11
	ふるい	2.76	0.00	2	2
	貸さない	2.76	0.00	2	2
8 けじめがつきにくい 指示が通りにくい	にくい	4.51	0.00	5	11
	けじめ	3.21	0.00	2	2
	つき	3.21	0.00	2	2
	指示	3.21	0.00	2	2
	通り	2.89	0.00	2	3
	トラブル	1.63	0.05	1	2
	興味	1.63	0.05	1	2

ローズアップされやすいものだけではなく、[問題行動の頻度が多い・〇〇できない]、[騒ぐ]、[暴力・言葉遣い・教師への反抗]などの多様な行動が含まれていることがわかる。

校種別による、最も指導困難な児童・生徒の特徴で有意に多く出現した単語を表3に示した。小学校では、友達関係でのトラブルや気に入らないことがあるとキレる児童に困っている。中学校では、授業中に教室に入らないというような授業中に起こる問題や服装の乱れなど、明らかな問題行動を起こす生徒に困っている。小学校の教師は、学級担任制であるため学級の和を大切にしている。したがって、友達同士で起こったトラブルを見過ごすことができないことがうかがえる。中学校の教師は、教科担任制であるため、生徒と関わるのは主に授業中である。したがって、授業中で起こった問題に目が行きやすいと考えられる。

性別による、最も指導困難な児童・生徒の特徴で有意に多く出現した単語を表4に示した。男性教師が女子の行動に困っているということ、女性教師は教室に入れない（不登校を含む）子どもに困っていることに特徴がある。「女子」という言葉を用いた男性教師の担当学年は、ほとんど小学校高学年であった。小学校高学年の女子児童は、男性教師の働きかけより、女性教師の働きかけのほうを肯定的にとらえるという報告がある（根本、1990）。男性教師の小学校高学年の女子児童に対する働きかけの難しさがうかがえる。

最も指導困難な児童・生徒がどのくらい存在するかを示したのが表5である。担任をしている教師では、0人と答えている教師もいるが、学級の中に一人でもいると答えた教師の合計は79人中53人で6割を超えていることがわかる。担任をしていない教師は担当している児童・生徒が多いわりに、最も指導困難な児童・

表3 校種別で見た最も指導困難な児童・生徒の特徴

校種別	特徴的な単語	検定値	有意確率	クラス内頻度	全体頻度	回答例
小学校 51人	ある	2.98	0.00	11	11	気に入らない事があるとき キレる
	友達	2.38	0.01	8	8	
中学校 52人	授業	3.4	0.00	18	22	授業中教室に入れない 指導に従わない 指導を聞き入れない 服装の乱れ
	中	2.9	0.00	10	11	
	指導	2.4	0.01	8	9	
	教師	2.22	0.01	9	11	
	登校	2.11	0.02	5	5	
	勝手	1.84	0.03	6	7	
	服装	1.76	0.04	4	4	

表4 性別で見た指導困難な児童・生徒の特徴

性別	特徴的な単語	検定値	有意確率	クラス内頻度	全体頻度	回答例
男性 38人	行動	2.6	0.00	10	14	自分勝手な行動をとる 指導に従わない 女子間のトラブル
	指導	2.35	0.01	7	9	
	女子	2.06	0.02	5	6	
	暴力	1.68	0.05	6	9	
女性 63人	教室	1.84	0.03	12	13	教室に入れない

表5 最も指導困難な児童・生徒の人数

①担任（クラス規模20人から40人）		②非担任（担当規模35人から730人）	
人数	度数	人数	度数
0人	26名	0人	13名
1人	19名	1人から5人未満	11名
2人	19名	5人から10人未満	10名
3人以上	15名	10人以上	8名

表6 扱いにくい児童・生徒に特徴的な単語

カテゴリー名	特徴的な単語	検定値	有意確率	クラス内頻	全体頻度
1 ○○できない・話が聞けない	できない	2.09	0.02	17	17
	話	1.88	0.03	15	15
2 自己中心的・協調性がない	ある	3.51	0.00	7	12
	傾向	3.46	0.00	4	4
	言動	3.03	0.00	4	5
	自己	3.03	0.00	4	5
	協調性	2.86	0.00	3	3
	中心的	2.86	0.00	3	3
	にくい	2.46	0.01	4	7
	無い	2.46	0.01	4	7
	攻撃的	2.12	0.02	2	2
	母親	2.12	0.02	2	2
	遅刻	1.68	0.05	2	3
暴力的	1.68	0.05	2	3	
3 教師に対して反抗的な態度をとる・暴力	反抗的	3.54	0.00	3	3
	態度	3.4	0.00	4	7
	とる	3.17	0.00	3	4
	グループ化	2.7	0.00	2	2
	嘘	2.7	0.00	2	2
	目	2.7	0.00	2	2
	つく	2.32	0.01	2	3
	暴力	2.32	0.01	2	3
	友人	2.32	0.01	2	3
児童	1.86	0.03	2	5	
4 友達に嫌がらせをする	らせ	3.74	0.00	2	2
	嫌	3.74	0.00	2	2

表7 学校種別に見た扱いにくい児童・生徒に特徴的な単語

校種別	特徴的な単語	検定値	有意確率	クラス内頻	全体頻度	回答例
小学校 49人	友達	2.15	0.02	7	7	友達に暴力をふるう
	自分	1.89	0.03	15	19	自分勝手・自分中心
中学校 42人	言動	2.12	0.02	5	5	自分勝手な言動
	教師	2.12	0.02	5	5	服装の乱れ
	担任	1.77	0.04	4	4	
	服装	1.77	0.04	4	4	

表8 扱いにくい児童・生徒の人数

①担任（クラス規模20人から40人）		②非担任（担当規模35人から730人）	
人数	度数	人数	度数
0人	19名	0人	12名
1人	17名	1人から5人未満	12名
2人	16名	5人から10人未満	10名
3人以上	27名	10人以上	10名

生徒がいると答える割合は担任をしている教師より少なかった。指導困難な児童・生徒は、担任の負担が大きいことが垣間見える。

2. 扱いにくい児童・生徒の特徴

扱いにくい児童・生徒の特徴に関する自由記述について、出現頻度2度以上の単語に反応した回答者を分析対象とした。3クラスターから11クラスターまでクラスター数を変化させて、[○○できない・話が聞けない]、[自己中心的・協調性がない]、[教師に対して反抗的な態度をとる・暴力]、[友達に嫌がらせをする]の4つのカテゴリに分類することにした(表6)。「○○できない」や「教師に対して反抗的な態度をとる・暴力」は、最も指導困難な児童・生徒の特徴と共通している。しかし、教師は「自己中心的・協調性がない」という学校生活での集団行動を乱す児童・生徒を扱いにくいと感じていることが明らかになった。

校種別に、扱いにくい児童・生徒の特徴で有意に多く出現した単語を表7に示した。小学校では、最も指導困難な児童・生徒の特徴と同様、友達関係に問題のある子どもが多く、また自分勝手、自分中心の児童が扱いにくいことに特徴がある。中学校では、教師や担任との関係、言動に問題のある子どもが扱いにくいことに特徴があるが、自分勝手との言葉も見られる。

指導困難な児童・生徒とは異なり、性別、担任の有無別には、単語の出現に有意差がなかった。つまり、扱いにくい児童・生徒は、指導困難な児童・生徒のように、いじめ、不登校など個別パターンに分かれるのではなく、教師の性別や担任の有無に関係なく、ある一定の傾向が見られると言うことであろう。ということは、扱いにくい子どもを、指導困難予備軍と考えるなら、扱いにくい内に対応することができるなら、不登校やいじめのように、個別の対応に迫られるのではなく、教員間で共通の認識の元に対応しやすいのかもしれないと考えられる。

扱いにくい児童・生徒がどのくらい存在するのかを示したのが表8である。担任をしている教師では、0人と答えている教師もいるが、一人でもいると答えた教師の合計は79人中60人で、7割を超えている。扱いにくい児童・生徒は、6割の教師がいると回答した(表5)最も指導困難な児童・生徒よりも多い割合で存在していることがわかる。

4. 総合考察

扱いにくい児童・生徒の実態を明らかにするために、まず当面の問題を抱えていると思われる最も指導困難な児童・生徒の実態を明らかにしたところ、「い

じめ」や「不登校」のような今日の学校教育問題として取り上げられやすいものだけではなく、多様な問題行動があることがわかった(表2, 3)。他方で扱いにくい児童・生徒の実態として挙げてきたものは、最も指導困難な児童・生徒の実態と類似した特徴の他に、「自己中心的」「協調性がない」「嫌がらせをする」など、学校での集団生活を乱すような児童・生徒の特徴が新たに明らかになった(表6)。扱いにくい子どもの特徴である自己中心の子どもは、最も指導困難な児童・生徒の特徴として挙げてきた教師への反抗、いじめへと繋がる要素を持っていると考えられる(寺田, 2003)。したがって扱いにくい子どもは最も指導困難な児童・生徒につながりかねないことが推測できる。

ところで近年の学校現場での多様な問題の山積に伴い、学校心理学が注目されている。学校心理学とは、学校教育において一人ひとりの児童生徒が学習面、心理・社会面、進路面における課題への取り組みの過程で出会う問題状況の解決を援助し、成長することを促進する心理教育的援助サービスの理論と実践を支える学問体系(石隈, 1999)のことである。学校教育をヒューマン・サービスと捉え、教師はサービスの一提供者となり、問題を抱えている子どもだけではなく、すべての子どもを心理教育的サービスの対象とするという点に特徴がある。学校心理学におけるサービスは、三段階に分類できる。一次的援助サービスは、すべての子どもを対象にし、教師が促進的援助と予防的援助を行う。二次的援助サービスでは、学習意欲の低下、友人をつくりにくいなど発達課題や教育課題の取り組みに困難をもちはじめた、もしくは、これから問題をもつ危険性の大きい一部の子どもを対象にし、教師や保護者が早期に援助ニーズの大きい子どもを発見し、スクールカウンセラーのコンサルテーションを受ける。三次的援助サービスでは、不登校・いじめ・非行などの個別の援助を必要とする子どもに対し、あらゆるサービスを用いてチームで援助をする。本研究では主に「扱いにくい児童・生徒」について考えてきたが、「扱いにくい児童・生徒」は、二次的援助サービスの範疇に入ると考えられる。そして、この二次的援助サービスの充実が、扱いにくい子どもへの対応となることが期待できる。

ところでアメリカでは、1980年代後半から学校をドロップアウトするようなりスクを抱えた子ども(at-risk student)が増加し、ドロップアウトを防ぐため、これらの子どもたちが抱えているリスクの要因を探る研究がなされている。リスクを抱えた子どもは、明らかな問題行動は顕在化していないが、何らかの問題を抱えているという点で、扱いにくい子どもと共通する

点がある。アメリカでは、これらの子どもを at-risk student と表しているように、危機に瀕していることはすでに予測できているが、何か問題が発生する前にリスクを抱えた子どもたちをケアしていくという予防的な発想に立った教育を行っているように思われる。

具体的には、一般的に①学業面、②感情面、③行動面のいずれかに問題のある子どもを指す (T.F. McLaughlin & Vacha, 1992a)。①学業面の問題は、学業達成テストの点数が低い、宿題をしないなど、②感情面の問題は、学校での成功感・動機づけが低いなど、③行動面の問題は、触法行為、自殺未遂などがリスクを抱えた子どもと考えられている。さらに多様なリスクを抱えた子どもへの支援対策として、アメリカでは各種のスクールプログラムが開発されている。この中で代表的なプログラムは、学級内プログラム (In-Class Programs) と学級外プログラム (Pull-out Programs) である (T.F. McLaughlin & Vacha, 1992b)。学級内プログラムでは、クラスメートによるピアサポート、教師による直接指導・個別指導、協同学習が行われている。学級外プログラムでは、基本的なスキル不足を援助するために、通常のクラスを一時離れ、能力別クラスでの学習、コンピュータ支援教育を行う治療・矯正教育を行っている。これらのプログラムを行うことにより、ドロップアウトの割合が減ったという報告がなされている (Howard, 1987)。

ドロップアウトを予防する他の方法としてゼロトレランス (Zero-Tolerance) 方式、つまり、規則違反者には寛容さなして、直ちに罰則を規則通りに適用して責任を取らせる方式である (加藤, 2000; 青木, 2007)。これもドロップアウトしてしまう前に子ども達を救おうとする一つの予防教育だと考えられる。

ゼロトレランス方式によって罰せられた生徒を矯正指導する学校はオルタナティブスクール (alternative school) と呼ばれ、アメリカのどの学校地区委員会もオルタナティブスクールを設置している。そこでは、正規の学校での教育に適さない生徒、また正規の学校に在籍させた場合、他の一般生徒に悪影響が出るような生徒などを収容し、確実に基礎学力を身につけさせる指導を行っている。その方式を採用したことにより、学校での暴力行為が減ったなど様々な効果が得られていることが報告されている (加藤, 2000)。ゼロトレランス方式も、学校で顕在化する問題行動の発生を未然に防ぐ予防策の一つになっている。

アメリカでは、両親を巻き込んだプログラムもある。このプログラムの一つでは、両親とスクールカウンセラー、学校のスタッフが、子ども達の成功を望んで話し合いの機会が多く設けられている。学校は両親

に家庭で子どもの学習を手助けする技法や知識を提供することで、両親が親としての役割・機能を促進させようともしている (Dennis, 1994)。

本研究の結果、7割以上の教師が、指導困難予備軍と考えられる「扱いにくい子ども」がクラスにいと答えている。そして、教師にとって扱いにくい子どもとは、学校生活での集団行動を乱す児童・生徒であり、アメリカと事情は必ずしも同じとは言えないだろう。そして日本の教師達も、アメリカの方法とは違うやり方でこれらの子ども達に根気強く関わっている。この点について、現在どのような対応が取られているかは次回報告することにする。いずれにせよ、これらの子どもたちの問題が顕在化しないような予防的な取り組みについての研究や実践を豊にしてゆくことが日本にとって必要なことであるに違いない。

【謝 辞】

本論文は、第一著者の指導の下、第二著者の小河響子が2003年度に岡山大学教育学研究科に提出した修士論文の一部に加筆修正したものである。テキストマイニングについては、吉村宰先生 (岡山大学教育学部、現在は長崎大学) の丁寧なご指導を受けました。記してお礼申し上げます。

【注】

1) この質問に対する結果は、次回報告することにする。

【引用文献】

- 青木多寿子 (2007) 生徒用ハンドブックに見るアメリカの生徒指導、生活指導、学校教育実践学研究 広島大学大学院教育学研究科附属教育実践総合センター, 13, 23-34.
- Parker, D. (1994) Every student succeed. california department of education
- Howard, J. C. (1987) Early prevention and intervention programs for at-risk students. Educational Document Reproduction Service.
- 石隈利紀 (1999) 学校心理学, 一教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス— 誠信書房
- 石隈利紀・田村節子 (2003) 石隈・田村式援助シートによるチーム援助入門, 学校心理学・実践編 図書文化

- 加藤十八 (2000) アメリカの事例から学ぶ学校再生の
決めて、ゼロトレランスが学校を建て直した 学事
出版
- 河上亮一 (1999) 学校崩壊 草思社
- 文部科学省 (2003) 生徒指導上の諸問題の現状につい
て (概要)
- 森田 勇 (2003) 気になる子への対応の原理 國分
康孝・國分久子 (監), 育てるカウンセリングによる
教室課題対応全書7 教室で気になる子 図書文化,
pp.30-35.
- 寺田治史 (2003) 自己中心的な子 國分康孝・國分久子
(監), 育てるカウンセリングによる教室課題対応全
書7 教室で気になる子 図書文化, pp.56-59.
- McLaughlin T. F. & Edward F. V. (1992a) The at-risk
student: A proposal for action *Journal of Instruction
Psychology*, 19(1), 66-68.
- T. F. McLaughlin & Edward F. V. (1992b) School
programs for at-risk children and youth: *A review
Education & Treatment of Children*, 15(3), 255-267.
- 吉田隆江 (2003) 「気になる」は心を育てるチャンス
國分康孝・國分久子 (監), 育てるカウンセリング
による教室課題対応全書7 教室で気になる子 図
書文化, pp.10-11.